

複合動詞「V-すぎる」の意味解釈について*

筑波大学大学院
井本 亮

On the Computational Interpretations of Japanese V-V Compound *V-sugiru* “over-V”.

Graduate School, University of Tsukuba

IMOTO Ryo

The aim of this paper is to give an account of the various “excessive sense” that Japanese V-V compound *V-sugiru* “over-V” provides. Based on Yumoto’s description and generalization of the facts, I propose an alternative conceptual semantic analysis of *V-sugiru* within the structure preserving binding theory proposed by Jackendoff (1991, 1996). I address the following conclusions: (a) the interpretations of *V-sugiru* are captured by the notion “boundedness”. (b) *V-sugiru* provides the excessive sense to the constituents that can be projected to an axis added by *V-sugiru*. (c) The readings of *excess time* and *excess distance* are introduced by projecting unbounded arguments to the axis; the readings of *excess quantity of material entity* and *excess iteration of the event* are introduced by duplicating bounded arguments to the axis.

キーワード：*「V-すぎる」、*[過剰]、*概念構造、*有界性、*構造保持束縛

0. はじめに

日本語複合動詞「V-すぎる¹」による[過剰]の意味解釈の多様性（何が過剰であると解釈されるか）については、いくつかの論考があるが²，管見の限りでは，由本（1997）による観察と一般化がもっとも優れていると思われる。由本は「すぎる」がVP補文構造内の名詞句や副詞句も意味的作用域に収めることや，複合する動詞句の意味的性質に応じて[過剰]の解釈可能性が変動することを仔細に観

言語科学研究第8号（2002年）

察，一般化するとともに，「V-すぎる」の概念構造を提案している。「V-すぎる」に関する由本（1997）の功績は極めて大きいといえるが，しかし，その主張にも課題がいくつか残されている。

そこで，本稿は，由本が提案した一般化と概念構造を修正・改良し，「V-すぎる」の多様な解釈可能性が説明できる，より生産性と予測性の高い形式化を提案することを主たる目標とする。以下，第1節では議論の出発点となる由本（1997）の成果を概観し，第2節で問題点を指摘，一般化を修正する。第3節では，本稿で採用する概念意味論の理論装置，有界性（boundedness）の素性化と有界性の値を転換させる概念関数（Jackendoff1991）と，事象のアスペクト的性質と数量概念の構造化を可能にした構造保持束縛関係（structure-preserving binding relation, Jackendoff1996）を概観する。第4節では，「V-すぎる」の機能を規定し，概念構造の改良案を提示する。第5節では，いくつかの具体的な事例を形式化し，本稿の概念構造が多様な意味解釈に適応することを示す。第6節は結語と今後の課題である。なお，本稿では「V-すぎる」の意味解釈にかかわる問題を中心的課題とするため，統語的問題については，特に言及しない³。

1. 先行研究——由本（1997）

本節では，由本（1997）の指摘を中心に「V-すぎる」の意味的性質を整理する。

由本は非能格自動詞，状態変化自動詞，存在・出現動詞，目的語の移動・運動を含意する動詞，経路補語をとる動詞，状態変化他動詞，作成動詞に動詞を大別し，文中の名詞句や副詞句の解釈も含めた総合的な文解釈を観察した結果，[過剰]の解釈の一般化を得た。その要諦をまとめると(1)のようになる。

- (1) a. 「V-すぎる」がもたらす[過剰]の意味は，前項動詞 V1 だけでなく，表層構造の VP 補文内の名詞句や副詞句，連体修飾句にも及ぶ可能性がある。
- b. [過剰]の意味は，VP 補文内の段階性を含意する副詞句に優先的に及ぶ。
- c. 文中に段階性を含意する副詞句がない場合，[過剰]の解釈は V1 の意味タイプによって変動する。

「V-すぎる」は補文に段階性（＝程度性）を要求する（影山1993）。そのため，

複合動詞「V-すぎる」の意味解釈について

VP補文中に段階的情態概念を表す副詞句が存在する場合には、その副詞句が表わす情態概念の程度が〔過剰〕であるという解釈が優先的に出る。ただし、〔過剰〕の意味の作用域は表層構造のVP補文内に限られる⁴。

そして、由本の一般化においてもっとも重要であり、本稿の考察の焦点となるのが、(1c)「文中に段階性を含意する副詞句がない場合」である。このとき「V-すぎる」がどのように解釈されるかは、動詞のタイプなど複雑な意味的条件による計算的解釈として決まる。その様相は次の(2)のように一般化される。(3)–(8)には、由本が示した意味解釈に相当する例文と各解釈の便宜上の呼称を示す。

(2) a. 段階性を帯びる副詞的要素が文中に存在しない場合、「過ぎる」は

- (i) 継続相の動詞と結合して行為の時間の過剰を意味する。
- (ii) 反復の解釈が可能な動詞と結合して頻度の過剰を意味する。
- (iii) 対象の状態変化を含意する非対格自動詞や他動詞と結合すると、結果の状態に段階性が認められる場合にはその状態の行き過ぎの解釈が優先され、段階性が認められない場合には対象物の数量の過剰の解釈が生じる。
- (iv) 経路を補語とする動詞と結合した場合のみ、主語の数量の過剰を意味する可能性がある。
- (v) 存在・出現を表す非対格自動詞や所有・作成を表す他動詞と結合すると、前者は主語、後者は目的語の数量の過剰の解釈が優先される。

(由本 1997 pp.114-115)

b. 「歩く」「運転する」など移動動詞では、移動した距離の過剰の解釈が生じる。 (同 p.108, 110)

(3) 「動作時間過剰解釈」(cf.(2a)-(i))

a. うちの子供が遊び過ぎて勉強をしないので困る。

(同 p.106(68a'))

b. コーヒー一杯で喫茶店に居すぎたせいで、店のマスターににらまれた。

(4) 「頻度過剰解釈」(cf.(2a)-(ii))

a. 悲惨な事故が起こり過ぎて何が起こってもあまり驚かなくなっ

言語科学研究第8号（2002年）

- てしまった。 (同 p.106(69a)改)
- b. マウスをクリックしすぎて、腱鞘炎になった。
- (5) 「主語数量過剰解釈」(cf.(2a)-(iii), (iv), (v))
- a. このごろは観光客がオランダ坂を歩き過ぎていて、情緒がない。
=歩いている観光客が多すぎる。 (同 p.111(78a))
- b. 元気な犬の子が生まれ過ぎて困っている。 (同 p.106(69c))
- (6) 「目的語数量過剰解釈」(cf.(2a)-(iii), (v))
- a. 役者は客席に手ぬぐいを投げ過ぎた。 (同 p.109(72b))
- b. あの画家は絵を描き過ぎて作品の値が上がらない。
(同 p.113(87a))
- (7) 「程度過剰解釈」(cf.(2a)-(iii))
- a. 餅が焼け過ぎていて堅かった。 (同 p.107(70b'))
- b. 味噌汁を温めすぎて、舌をやけどした。
- (8) 「移動距離過剰解釈」(cf.(2b))
- a. 彼は車を運転し過ぎて腰痛になった。
=運転したのが {長距離／頻繁／長時間} 過ぎた。
(同 p.109(71a))
- b. 山道を歩きすぎて、足にマメができた。

(2), (3)-(8)に見られる意味解釈の現象は、副詞的修飾要素と述語動詞との修飾関係の問題にも通底するものであり⁵、重要な指摘である。そして、このような一般化を導くために由本が提案した概念構造が次の(9)である。

- (9) a. 過ぎる：[_{Event}] GO [TO [OVER [STANDARD]]]
- b. 真紀はパンを焼き過ぎた。[[[MAKI] CAUSE [BECOME [[BREAD] BE [AT [TOASTED]]]]] GO [TO [OVER [STANDARD]]]]
(同 p.123(102a, b))

(9a)の概念構造は基本的には自動詞用法の延長と位置づけられ、V1が表わす事象 (Event) が程度スケール上を基準点を越えたところまで移動するという概念化が採用されている。(9b)は「真紀はパンを焼き過ぎた」の概念構造で、下線は[過剰]の解釈を受けた要素を示す。由本は、[過剰]の意味解釈の多様性はV1の概念構造から選出される意味要素の違いによるものと結論づけている。

複合動詞「V-すぎる」の意味解釈について

2. 先行研究の問題点と「V-すぎる」再分析

本節では、由本（1997）の主張の問題点について指摘する。まず、形式的一般化としての概念構造について述べる。(9)の形式化の最大の問題点は、[過剰]の作用域が形式化されていないため、意味解釈が構造的に予測できないことである。由本の概念構造は基本概念以上の意味は形式化されておらず、詳細な観察から導かれた肝心の一般化が反映されていないのである。文の解釈可能性を予測できないという問題は、意味的曖昧性 (ambiguity) が形式化されないという問題も孕む。(9b)の文は次の(10)のように二義的⁶である。

(10) 真紀はパンを焼き過ぎた。

- a. =パンの焼き具合が過剰だ。(→パンが焦げた) [程度過剰解釈]
- b. =焼いたパンの数が多すぎる。(→パンが余った) [目的語数量過剰解釈]

- (11) a. [[[MAKI] CAUSE [BECOME [[BREAD] BE [AT [TOASTED]]]]]]
GO [TO [OVER [STANDARD]]]] (= (9b))
- b. [[[MAKI] CAUSE [BECOME [[BREAD] BE [AT [TOASTED]]]]]]
GO [TO [OVER [STANDARD]]]]

(9b)における[過剰]の作用域は(11)のように区別されるが、下線表示に構造的な理由づけはなく、(9)の形式化では意味解釈を構造的に導くことができない。

また、(9)の形式化には数量概念が形式化されていない。Jackendoff(1990)、影山(1996)などの概念的形式化では数量概念は形式化に反映されてこなかったが、「V-すぎる」の多様な意味解釈を概念的形式化から導くためには数量概念の形式化の導入が必要である。他にも事象項の導入に関する課題も残されている⁷。

次に現象の一般化について。由本は主語数量過剰解釈について「経路を補語とする動詞と結合した場合のみ、主語の数量の過剰を意味する可能性がある」と一般化しているが ((2a)-(iv))、主語数量過剰解釈は移動を表わさない事例にも見られる。

- (12) a. 視聴者が一度に電話をかけすぎて、テレビ局の回線がパンクしてしまった。
- b. あそこには人が居すぎる。(城田 1998p.149)

また、以下の例に見られるように、経路補語と運動様態動詞句からなる

言語科学研究第8号（2002年）

V1 と結合した事例においても，その解釈は容易に変動する。

(13) 主語数量過剰解釈

- a. 観光客がいったん吊り橋を渡りすぎて，橋が落ちてしまった。
- b. 近頃は犬が公園を散歩し過ぎていて，小さい子供が遊べない。
＝散歩している犬が多過ぎる。 (由本 1997p.111(78b))

(14) 移動距離過剰解釈・動作時間過剰解釈

- a. 太郎は坂道を歩きすぎて，足が棒になった。
- b. その馬はアスファルトの上を走りすぎて，蹄がすりへってしまった。

(15) 頻度過剰解釈

- a. その兵士はマラトンーアテネ間を走りすぎて，死んでしまった⁸。
- b. 300人の観光客がオランダ坂を歩きすぎた。＝*観光客の数が多過ぎる

由本が示した例を含む(13)と異なり，(14)(15)では経路の補語と共起しても主語数量過剰解釈は出ず，頻度過剰解釈や移動距離過剰解釈が出る。また，数量詞による制限修飾を受けるかどうかや名詞が表わす実体の特定性で文の意味解釈が変わってくる ((13)と(15)を参照)。このことから，経路補語との共起は本質的理由ではないと考えられる。(5)(12)(13)において主語数量過剰解釈が出るのは，[過剰]の意味と整合する要素が文中に主語名詞句（の数量概念）しかないからである。換言すれば，(13)では経路が[過剰]の意味と整合しないために，移動距離過剰解釈が出ないのである。

このような経路は「有界的経路 (bounded Path cf. Jackendoff 1983, 1990, 1991, 1996, 影山・上野2001)」，つまり，その両端・範囲が限界づけられた経路である。(5)の経路「オランダ坂」は固有の境界によって限界づけられた経路だから「経路が長すぎる，多すぎる」などの経路の過剰解釈が出ない。(13)や(15)の意味解釈も同じ理由で，[過剰]の意味は他の整合可能な要素に及ぶことになる。

したがって，主語名詞句が不特定複数読みを許すことも主語数量過剰解釈の要件となる（単数読みに限られる場合には頻度過剰解釈となる）。有界的経路と同様の理由で，単数読みと特定複数読みの名詞句⁹は数的に有界づけられた有界的実体 (bounded object) であるため，[過剰]の意味と整合しない ((15))。これに対

複合動詞「V-すぎる」の意味解釈について

して、不特定複数読みを許す名詞句が表わす実体は不可算の実体と同様、非有界の実体 (unbounded object) と捉えられる。日本語では数性は文法的カテゴリではなく、名詞句の多くは数的に曖昧であるが、名詞句の数性も文の意味解釈に関与する (仁田1992, 北原1999, 井本2001)。次の例を見られたい。

(16) a. *1頭のベンガルトラが殺されすぎた。

b. 野生のベンガルトラが殺されすぎたため、生きているベンガルトラは動物園でしか見られない。[主語数量過剰解釈]

(16a)の事象には段階性はなく、不可逆的含意から反復化も不可能で、主語名詞句の数的特定性から主語数量過剰解釈も成立しないために、[過剰]の意味がどの要素にも及ばず、解釈不能になる¹⁰。しかし(16a)の主語名詞句に不特定複数読みを許すと正文になる ((16b))。これは主語の数量だけが[過剰]の意味と整合しうるためである。

このとき頻度過剰解釈も否定されないことに注意されたい。これは有界的事象が主体の複数化によって数的に拡張されうるためである。このことは(10)の二義的解釈や、(8)のように潜在的な別の解釈が否定されないことと同様で、「V-すぎる」の解釈可能性は[過剰]の意味と矛盾しないかぎりにおいて多様である。

以上の議論からもわかるように、実体 (数性)、経路 (限定性)、事象 (限界性)の三者は、概念的境界の有無に関する概念「有界性 (boundedness)」のもとで並行的な位置づけを与えられる (cf. Jackendoff1990, 1991, Langacker1991, 石田1998など)。有界性の概念を用いることで、一見多様な意味範疇に展開するように見える「V-すぎる」の意味解釈をより高次に一般化することが可能になる。そこで、本稿は「V-すぎる」の解釈可能性に関する一般化の修正案(17)を提案する。

(17) 「V-すぎる」による[過剰]の解釈は意味的に整合する要素に及ぶ。

[過剰]の意味と整合する要素は非有界的要素であり、整合する要素の数だけ意味解釈の可能性がある。

3. 概念構造の導入

3.1 有界性の素性化と概念関数の導入——Jackendoff (1991)

本節では、前節での一般化に用いた有界性を形式的に扱うための理論装置である有界性の素性化と概念関数について概観する。Jackendoff (1991) は、実体と事

言語科学研究第8号（2002年）

象の概念的並行性を概念構造に導入するために、汎範疇的概念である有界性を「±b (bounded 境界)」と「±i (internal structure 内部構造)」に素性化した。すべての実体と事象は、この2種類の素性の交叉分類として表示される。(18)を見られたい。

(18) 有界性の体系と実体／事象の意味的性質

	Material Entity ¹¹	Event/Process
+b, -i	Individuals (a pig)	限定事象 (John ran to the store.)
-b, -i	Substances (water)	非有界の過程 (John slept.)
-b, +i	Aggregates (buses, cattle)	非有界の反復過程 (The light flashed continually.)
+b, +i	Groups (a committee)	有界の反復事象 (The light flashed until dawn.)

(Jackendoff1991p.20, 米山 2001p.23(4)(5)より)

このような素性化によって、実体と事象との概念的連動性が保証される。これは、有界性の値の転換（写像）を行う概念関数の適用についても同様で、実体／事象の別を問わず適用される。(19)は複数化関数PL (plural)，次ページ(20)は構成関数COMP (composed of) の実体への適用例である¹²。PLは個体[+b, -i]を集合[-b, +i]に転換する。COMPは[-b]の非有界実体／事象を構成物として写像，[+b]に有界化する。

(19) dogs =
$$\left[\begin{array}{c} -b, +i \\ \text{Mat PL} \left(\left[\begin{array}{c} +b, -i \\ \text{Mat DOG} \end{array} \right] \right) \end{array} \right]$$
 (Jackendoff1991p.21(12c))

複合動詞「V-すぎる」の意味解釈について

$$(20) \text{ a house of wood} = \left[\begin{array}{c} +b, -i \\ \text{HOUSE} \\ \text{COMP} \left(\left[\begin{array}{c} -b, -i \\ \text{WOOD} \end{array} \right] \right) \\ \text{Mat} \end{array} \right] \quad (\text{同 p.23(18)})$$

概念関数の適用と素性転換は、語彙的意味によらない意味解釈に説明を与える。次の(21)では、動詞句は単数主語による点的事象を表わすにも関わらず、文全体で有界的反復的事象と解釈される。これは、有界性の不整合に起因する解釈である。untilの項は非有界的項に限られるので、このままでは意味的不整合を起こす。この衝突を避けるために導入されるのがrules of construal (解釈規則)である。解釈規則によって複数化関数PLが適用され、点的事象を複数化することで非有界化する。


(21) The light flashed until dawn =

$$\left[\begin{array}{c} +b \\ [\text{DIM } 1d \text{ DIR}] \\ \text{COMP} \left(\left[\begin{array}{c} -b + i \\ \text{PL} \left(\left[\begin{array}{c} +b \\ [\text{DIM } 0d \text{ DIR}] \\ \text{LIGHT FLASH} \end{array} \right] \right) \right] \right) \\ \text{Sit BDBY}^+ \left(\left[\begin{array}{c} \text{Time} \\ \text{DAWN} \end{array} \right] \right) \end{array} \right] \quad (\text{Jackendoff 1991 p.41(59)})$$

Jackendoffが提案した有界性のシステムと概念関数、解釈規則の適用によって、概念構造が持つ説明力はさらに向上したといえる。

3.2. 構造保持束縛理論の導入——Jackendoff (1996)

Jackendoffはこのような実体と事象の概念的並行性をさらに展開した。事象の概念的構造が物理的実体の概念的定義からの拡張として定義できるとした。次の(22)は物理的実体「チューブ」の定義である。

(22) a. tube : 

言語科学研究第8号 (2002年)

$$b. \text{ tube の概念構造: } \left[\begin{array}{l} [1d] \\ \parallel \\ 2d \\ \text{Annulus shape} \end{array} \right]$$

(Jackendoff1996p.319(19a)(20a))

このように物理的実体tubeは断面構造 (cross-section, 2次元のAnnulus shape) と1次元の投射軸によって定義される。これと同様の定義法によって、事象における構成要素間の同期的関係を捉えることが可能になる。空間移動事象の例でいうと、事象が全体のn%推移するとき、時間も所要時間のn%が経過し、対象物は全移動経路中のn%の位置にある。これが事象内における時空間の同期的関係であり、Jackendoff (1996) はこれを「structure-preserving binding relation (構造保持束縛関係)」として形式化した。次の(23)は岩本 (2001a) による有界的事象の構造保持束縛である。

(23) John ran to the station.

$$\left[\begin{array}{l} \left[\begin{array}{l} [1d] \\ +b \end{array} \right]^\alpha \left[\begin{array}{l} 1d \\ +b \\ \text{BDBY}^+([\text{STATION}]^\beta) \end{array} \right]^\alpha \left[\begin{array}{l} 1d \\ +b \\ \text{BDBY}^+([\text{T}_i]^\beta) \end{array} \right]^\alpha \\ \parallel \qquad \qquad \qquad \parallel \qquad \qquad \qquad \parallel \\ 0d \\ \text{Sit BE } ([\text{JOHN}], [\text{Space } 0d]); \qquad \qquad \qquad [\text{Time } 0d] \end{array} \right]$$

(岩本 2001a p.27(43))

事象は0次元の状態 (BE) の時間的推移による投射として構造化される。αで同一標示された上段が同期的関係を捉える投射軸 (sp-bound axis, 束縛軸) で、空間は点 ([Space 0d]) が投射されることで1次元の経路として構造化される。上例では移動経路がStationによって限界づけられることで (BDBY+([STATION])), 束縛軸の素性が[+b]となり、事象全体が有界化する。こうした事象構造が structure-preserving binding relation (構造保持束縛関係, 略称sp-binding) である。経路の終端において事象の推移と時間経過も終結するという経験的事実は構造保持束縛による同期的投射と束縛軸の有界性によって形式化される。この構造保

複合動詞「V-すぎる」の意味解釈について

持束縛と有界性と概念関数の操作を組み合わせることで、多様な意味解釈を与える事例の形式化が可能になる。

4. 「V-すぎる」の機能と概念構造

4.1. 「V-すぎる」の概念的意味

本節では、2節で得られた一般化を構造保持束縛関係理論の枠組みで検討し、基本構造に関する提案を行う。まず、「V-すぎる」の概念的意味については、「標準と過剰の境界（＝基準点）を越えること」という従来の見解を踏襲する（(24)(25)）。

(24) コトが標準的姿を遥かに越えて行われることを示す。（城田 1998p.149）

(25) ある事象が基準（STANDARD）を越える（由本 1997p.123）

また、「V-すぎる」のテイル形は結果相解釈となる（cf. 姫野1982p.373）¹³。

(26) 太郎が押す台車は荷物を載せすぎているので、前に進まない。

以上から、本稿では「V-すぎる」の概念的意味を次のように規定する。

(27) 「V-すぎる」が表わす事象は、V1の事象が標準と基準の境界を越えることを表わす有界的事象（+b）である。

4.2. 「V-すぎる」の機能と概念構造・投射のメカニズム

次に「V-すぎる」の機能的側面を検討する。「V-すぎる」の機能とは、V1と結合してその構成要素に〔過剰〕の意味を与えることであるが、本稿では、これを構造保持束縛関係理論の観点から次のように仮定する。

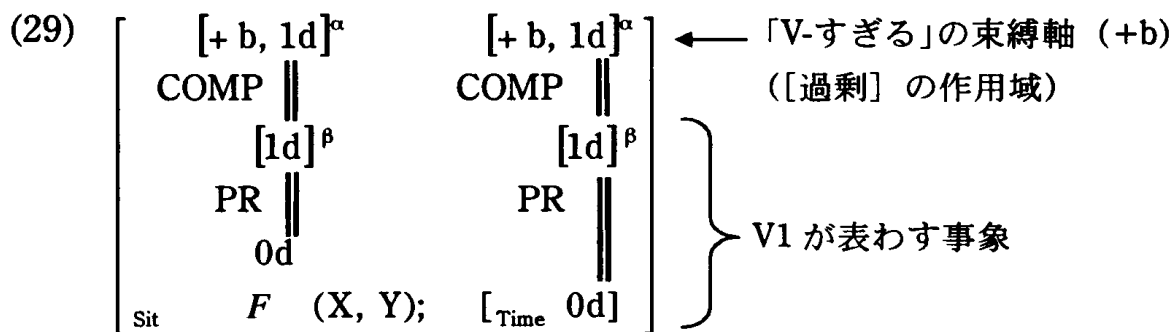
(28) 「V-すぎる」の機能：

- a. V1と結合し、V1の構造保持束縛に束縛軸を付加する。
- b. V1の構造保持束縛の構成要素のうち、「V-すぎる」の束縛軸の素性（+b）に整合する要素を投射する。
- c. 「V-すぎる」の束縛軸に投射された構成要素に〔過剰〕の意味を加える。

VP補文を項に取る統語的複合動詞としての性質から、V1と「すぎる」の結合を、V1の構造保持束縛に「すぎる」の束縛軸が付加されると考える。そしてV1

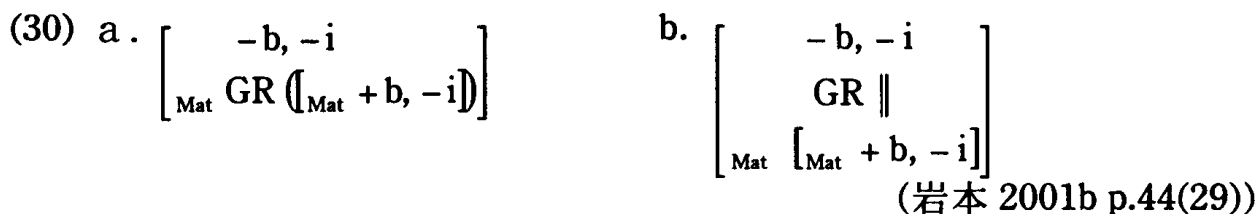
言語科学研究第8号（2002年）

の構成要素がこの束縛軸に投射され構造保持束縛される。ただし「V-すぎる」の束縛軸の有界性は[+b]だから，これに整合する構成要素でなければならない。そして「すぎる」の束縛軸に投射された構成要素に[過剰]の意味が及ぶのである。この仮定を形式化したものが次の「V-すぎる」の事象構造の雛型である。



(29)の最下段の断面構造 ([F (X, Y); [Time 0d]]) と同一指示標識 β の束縛軸がV1の事象を表わす (PRは投射関係を示す。岩本2001b¹⁴)。 α は「V-すぎる」によって付加された束縛軸で，ここが[過剰]の作用域となる。ここに投射され，構造保持束縛された構成要素が[過剰]の解釈を受ける。投射を規定するのは「V-すぎる」の付加とともに導入される概念関数COMP (Jackendoff1991, 3.1節参照) である。

Jackendoff (1996) では構造保持束縛構造内での概念関数の適用は行われていないが，岩本 (2001b) が内包関数と抽出関数という関数の対立関係から，構造保持束縛理論における投射 (projection) を内包関数の一種 (PR) と位置づけたことで，Jackendoff (1991) と Jackendoff (1996) で提案された二つの理論装置は統合され，理論的説明力は強化された。これによって，関数適用と投射を統一的な形式化のもとで扱うことができることになる。(30)における非有界化関数 GR は等価である。



さて，前述のように「V-すぎる」の素性は[+b]であり，この素性に整合する[-b]という素性を持つ構成要素しか投射されない ([+b]の要素は原理的に[+b]の項に

複合動詞「V-すぎる」の意味解釈について

なれない)。COMP関数の導入は[+b]の素性を持つ「V-すぎる」の語彙的要請と、構造保持束縛された要素に[過剰]の意味を与えるという「V-すぎる」の機能から動機づけられたものである。要するに、「V-すぎる」に構造保持束縛されることはCOMP関数の項として写像されることである。COMPの定義からV1の構成要素の投射可能性は次の(31)のように規定され、同時に各構成要素の投射可能性も予測される。

(31) [-b]の値を持つ構成要素は「V-すぎる」の束縛軸に投射されうる。

- a. 有界性が[-b]の項：直接投射されうる。
- b. 有界性が[+b, -i]の項：直接は投射されない。投射されるためには、複数化関数 PL の適用を受けて非有界化([-b, +i]) する必要がある。
- c. 有界性が[+b, +i]の項および特定の (specific) な項：投射されない。

(31)について補足すると、[+b]の要素は、そのままではCOMPの項にはならない。そこで、当該の構成要素を投射するためには、その素性を[-b]に転換させる必要がある。このとき素性転換のための解釈規則(3.1節参照)が導入され、これにより複数化関数PLが適用される。数量に関わる過剰の解釈は、このPL関数の導入によって導出されると考えられる。これが「V-すぎる」の意味解釈のメカニズムである。

以上の提案にもとづき、次節ではいくつかの具体的な事例の形式化を行う。

5. 具体的な事例の形式化

本節では、前節までの提案を具体的な事例に適用することによって、「V-すぎる」の解釈可能性を構造的に予測可能にする構造保持束縛による形式化の適用例を示す。

5.1. 動作時間過剰・移動距離過剰解釈

まず、動作時間過剰解釈、および移動距離過剰解釈が出る事例である。事例として、非有界的移動事象の例を使うことにする。

動作時間過剰解釈と移動距離過剰解釈が導出されるのは、V1が非有界的事象を

言語科学研究第8号（2002年）

表わす場合であった。移動事象を表わす場合にも，その移動経路は非有界的である（有界的経路の場合は5.2節参照）。(32)がその形式化である。

「太一が山道を歩く」という空間移動事象では，事象項と空間項，時間項が構造保持束縛される。統語構造で主語名詞句に対応する断面構造BEの第1項（TAICHI）は特定の個体なので投射されない。経路上の移動（＝移動物の位置）と事象の推移とは同期的だから，空間項は事象の推移と同期的な非有界的経路として構造保持束縛され，経路「山道」として構造化される（ β ）。基体となるV1の空間移動事象は非有界的だから， β に投射された事象項・空間項・時間項は直接「V-すぎる」に投射される。

(32) 太一は山道を歩きすぎた [移動距離過剰解釈]

$$\left[\begin{array}{ccc} [1d, + b]^{\alpha} & [1d, + b]^{\alpha} & [1d, + b]^{\alpha} \\ \text{COMP} \parallel & \text{COMP} \parallel & \text{COMP} \parallel \\ [1d, - b]^{\beta} & [1d, - b]^{\beta} & [1d, - b]^{\beta} \\ \text{PR} \parallel & \text{PR} \parallel & \text{PR} \parallel \\ 0d & & \\ \text{Sit} \quad \text{BE} \left(\left[\begin{array}{c} + b, - i \\ \text{Human TAICHI} \end{array} \right], \left[\begin{array}{c} \text{Space} \\ 0d \end{array} \right] \right); & & \left[\begin{array}{c} \text{Time} \\ 0d \end{array} \right] \end{array} \right]$$

その結果，移動距離過剰の解釈が導出される。このとき，時間の経過は事象の推移と経路上の位置と同期的束縛として構造化されている。これで，(8)における{長時間／長距離}という2種類の解釈可能性は構造的含意として保証される。

5.2. 頻度過剰解釈

ここでは，V1の概念構造から検討していく。次ページ(33)は有界的経路上の移動事象の概念構造である。有界的稠密行路¹⁵「マラトンーアテネ間」の素性を源とした有界的事象[+b]であることに注意されたい。このままでは，V1の構成要素を「V-すぎる」の束縛軸に投射することは素性不整合により不可能であり，文は解釈不能に陥る。そこで，構成要素の意味的不整合を回避する解釈規則（3.1節）が適用される。ここでは複数化関数PLが導入される。このとき経路「マラトンーアテネ間」はその特定性から写像されないのので，事象項（と時間項）のみがPL

複合動詞「V-すぎる」の意味解釈について

関数の項となる。

(33) その兵士はマラトンーアテネ間を走った。

$$\left[\begin{array}{c} [1d, +b]^{\alpha} \\ \text{PR} \parallel \\ \text{Od} \\ \text{Sit BE} \left(\left(\begin{array}{c} \text{DEF } +b, -i \\ \text{Human SOLDIER} \end{array} \right), \left[\begin{array}{c} \text{Space Od} \end{array} \right] \right); \end{array} \right. \left. \begin{array}{c} \left[\begin{array}{c} [1d, +b, +DEN] \\ \text{BDBY}^{-} \left(\begin{array}{c} \text{Place MARATHON}^{\beta} \end{array} \right) \\ \text{BDBY}^{+} \left(\begin{array}{c} \text{Place ATHENS}^{\gamma} \end{array} \right) \end{array} \right]^{\alpha} \\ \text{PR} \parallel \\ \left[\begin{array}{c} [1d, +b, +DEN] \\ \text{BDBY}^{-} \left(\begin{array}{c} \text{Time }^{\beta} \end{array} \right) \\ \text{BDBY}^{+} \left(\begin{array}{c} \text{Time }^{\gamma} \end{array} \right) \end{array} \right]^{\alpha} \\ \text{PR} \parallel \\ \text{Time Od} \end{array} \right] \quad i < j
 \end{array}$$

非有界化された構成要素は「V-すぎる」に投射される。こうして解釈不能は回避され、結果として頻度過剰解釈が導出される。その結果が(34)である。概念構造内の δ の束縛軸は解釈規則によって導入されたものである。PLの適用によって、構成要素の数量概念に関する意味解釈が動機づけられる。頻度過剰解釈が複数化された事象項の投射から導出されることが構造的理理由とともに明示化される。

(34) その兵士はマラトンーアテネ間を走りすぎた [頻度過剰解釈]

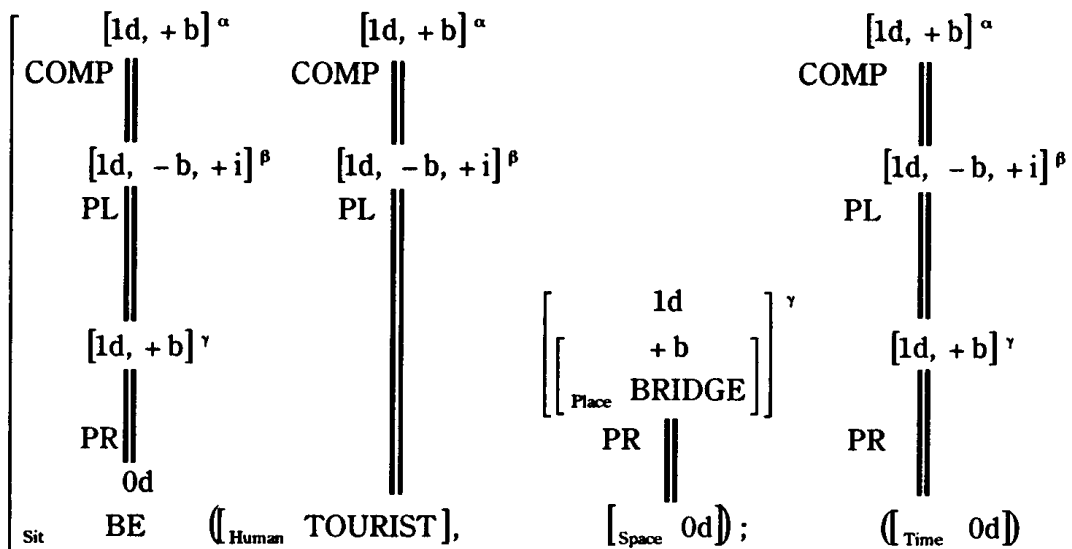
$$\left[\begin{array}{c} [1d, +b]^{\alpha} \\ \text{COMP} \parallel \\ [1d, -b, +i]^{\beta} \\ \text{PL} \parallel \\ [1d, +b]^{\alpha} \\ \text{PR} \parallel \\ \text{Od} \\ \text{Sit BE} \left(\left(\begin{array}{c} \text{DEF } +b, -i \\ \text{Human SOLDIER} \end{array} \right), \left[\begin{array}{c} \text{Space Od} \end{array} \right] \right); \end{array} \right. \left. \begin{array}{c} [1d, +b]^{\alpha} \\ \text{COMP} \parallel \\ [1d, -b, +i]^{\beta} \\ \text{PL} \parallel \\ \left[\begin{array}{c} [1d, +b, +DEN] \\ \text{BDBY}^{-} \left(\begin{array}{c} \text{Place MARATHON}^{\beta} \end{array} \right) \\ \text{BDBY}^{+} \left(\begin{array}{c} \text{Place ATHENS}^{\gamma} \end{array} \right) \end{array} \right]^{\alpha} \\ \text{PR} \parallel \\ \left[\begin{array}{c} [1d, +b, +DEN] \\ \text{BDBY}^{-} \left(\begin{array}{c} \text{Time }^{\beta} \end{array} \right) \\ \text{BDBY}^{+} \left(\begin{array}{c} \text{Time }^{\gamma} \end{array} \right) \end{array} \right]^{\alpha} \\ \text{PR} \parallel \\ \text{Time Od} \end{array} \right] \quad i < j
 \end{array}$$

言語科学研究第8号（2002年）

5.3. 主語数量過剰解釈

次は実体の数量概念に及ぶ解釈を検討する。事例としては有界的経路上の空間移動事象を用いる。2.2節で指摘したように，空間移動事象で主語数量過剰解釈が出る意味的要件はその経路が有界的であること，主語名詞句の不特定複数読みが可能であることであった。(35)がこのケースの形式化の例である。

(35) 観光客が吊り橋を渡りすぎた [主語数量過剰解釈]



V1で表わされる事象の推移と動作主体は同期的関係にはないので，「観光客」は γ の束縛軸には投射されない。その一方で，「V-すぎる」の投射を受けるために複数化の解釈を受ける。 β の束縛軸は解釈規則による適用ではなく，主語名詞句「観光客」の数的曖昧性が投射によって確定したという日本語の語彙の内的動機によるものである。これに伴い事象項と時間項も複数化の適用を受けるが，これは「吊り橋を渡る」という有界的事象の回数が主体の数量と同期的関係として解釈される「達成量」(矢澤1985)の形式化ということになる。なお，紙幅の都合から目的語数量過剰解釈については割愛するが，そのメカニズムも基本的にこれと変わらない。

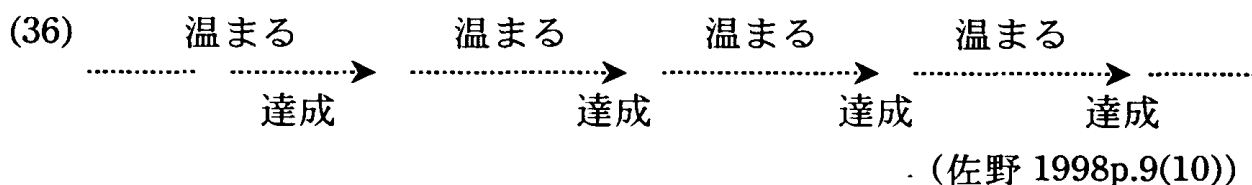
5.4. 二義的解釈——程度過剰解釈と目的語数量過剰解釈

最後に，2.1節で指摘した二義的解釈を示す。事例としては程度過剰解釈と目的語数量過剰解釈が出る(10)「真紀はパンを焼きすぎた」を用いる。

まず程度過剰解釈を見てみよう。ここでの変件事象「パンが焼けた状態

複合動詞「V-すぎる」の意味解釈について

(toasted) になる (ようにする)」は佐野 (1998) のいう [−限界／進展的变化] と考えられる。[−限界／進展的变化] を表わす動詞は「変化に [進展性] を伴う」と同時に、「いったん成立した結果状態が更に変化する可能性を持つ」動詞と規定される (p.8)。[−限界／進展的变化] 動詞は一般的には限界動詞に分類されるが、「変化達成が漸次的に累加され、そのたびに程度の異なる結果状態が成立する」という原理的には無限に起こりうる変化 (p.9)」である。これを佐野は次の(36)のように図式化している。



程度過剰解釈が出る状態変件事象はこのタイプの動詞であると考えられる¹⁶。[−進展的变化] の事象ではそもそも程度過剰解釈は不可能であり、また [+進展的变化] の状態変件事象は期間副詞とも期限副詞とも共起する。

(37) 王は家来を殺しすぎたために、民の信を失った。[目的語数量過剰解釈のみ]

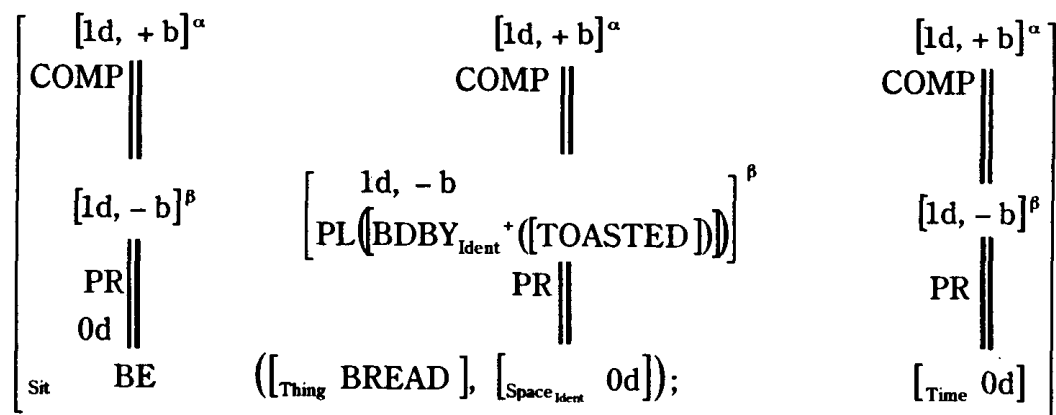
- (38) a. 太一は卵を {3分/3分で} ゆでた。
 b. トラは {*3分/3分で} シマウマを殺した。

以上から、「V-すぎる」と結合して程度過剰解釈と解釈された状態変件事象は非有界的事象と捉えられていると考えられる。状態変件事象の形式化は対象物が属性場 (Identificational field, Jackendoff1983) に拡張された空間を状態変化の限界点に向かって動進するものと捉える。次ページ(39)が程度過剰解釈の事例の概念構造である。

対象物の状態変化には動詞が含意する境界 (BDBY+([TOASTED])) があるが、[進展的变化] を含意しないV1は程度過剰解釈が不可能であるから、ここでの状態変化は非有界化していると考えられる。佐野が指摘した [−限界／+進展的变化] の含意から、ここではPL関数による限界点の複数化と考える。これによって進展的状态変化が「V-すぎる」に投射され、結果的に程度過剰解釈が導出されることが導かれる。

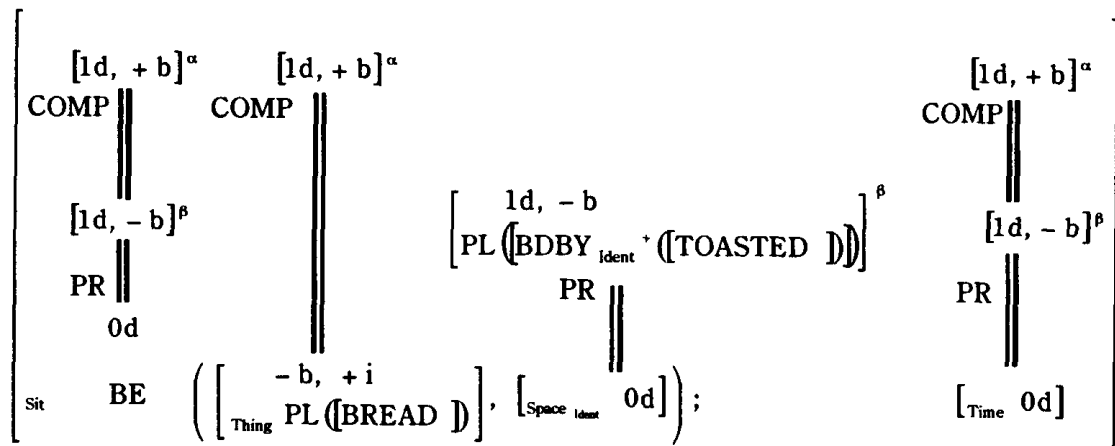
言語科学研究第8号（2002年）

(39) パンを焼きすぎた。[①程度過剰解釈]



別の解釈，目的語数量過剰解釈はV1の対象項を投射することで形式化される。ここでは(34)とは異なり1回の事象として解釈される¹⁷。(40)がその結果である。

(40) パンを焼きすぎた。[②目的語数量過剰解釈]



6. おわりに

本稿の提案する「V-すぎる」の機能と概念構造によって、「V-すぎる」の解釈の多様性に説明が与えられることになった。[過剰]の意味は「V-すぎる」の構造保持束縛に投射可能な意味的整合性を備えた構成要素に及び，構成要素が「V-すぎる」と整合しない場合には解釈規則によって導入される概念関数を適用して素性を転換し，整合的な投射を導くのである。このような本稿の提案は，同時に「V-すぎる」と整合しない事例も予測可能にする。たとえば，非有界的移動事象とマデ句によって表わされる達成的移動事象と「V-すぎる」は結合しない。

(41) *百合子は沖合の離れ小島まで泳ぎすぎた。

複合動詞「V-すぎる」の意味解釈について

マデ句は非有界的事象を有界づける機能を担い、until句や「V-すぎる」と同様、項をCOMP関数に写像する（伊藤2000）。外的に有界化された事象を再度有界化することはThe Single Delimiting Constraint (Tenny1994p.79) に抵触するため非文となるのである。また、特定複数読みの実体には〔過剰〕の解釈が及ばないという事例（cf.(15)）についても、PLとCOMPの関数適用に関する余剰操作として説明できる。

このように、本稿の提案は「V-すぎる」の多様な解釈可能性（と不可能性）に原理的な説明を与える包括的なものであり、「V-すぎる」の意味解釈に対する説明力は大きく向上したと考えられる。しかし、「V-すぎる」の最大の意味的特徴である〔過剰〕の意味そのものの概念化には至らなかった。そのためには、後項動詞「-すぎる」の拡張元である「過ぎる」など、〔通過点〕によって特徴づけられる空間移動事態の構造保持束縛理論から再検討する必要がある。これについては稿を改めて論じたい。

注

* 本稿は、日本言語学会第121回大会（2000年11月25日～26日、於名古屋学院大学）での研究発表「複合動詞「過ぎる」の意味解釈について」を加筆・修正したものである。発表の際、江口正先生から有益なコメントを頂戴した。論文化に際しては、査読者の岩本遠徳先生、木川行央先生のご教示によって、議論を一部改良することができた。ここに感謝申し上げます。

¹ 由本（1997）では「過ぎる」と表記されているが、本稿では「すぎる」と表記する。『CD-ROM版新潮文庫100冊』の用例などを見るかぎり「すぎる」のほうが優勢であるためである。

² たとえば影山（1993）、城田（1998）、姫野（1982, 1999）、山川（2000）など。

³ 統語的観点からの論考（影山1993、由本1997）では「V-すぎる」が非対格型の統語的複合動詞であること、補文にVPを取ることなどが指摘されている。由本はVP補文構造内の修飾要素も〔過剰〕の作用域に入ることなどを指摘している（p.122）。

⁴ しかし、「高い値段の魚を買いすぎた」に「魚の値段が高すぎる」という解釈はなく、VP補文内という規定は不十分である。また、解釈は二格後置詞句にも及ぶが（由本 p.122(100)）、このとき動詞直前に位置する要素が優先的な解釈を受けやすいことを指摘しておきたい。

(i) 壺を棚の上の方に置きすぎた。＝置いた位置が上すぎる>壺の数が多すぎる

(ii) 棚の上の方に壺を置きすぎた。＝壺の数が多すぎる>置いた位置が上すぎる

⁵ 不定数量詞「たくさん」（cf.影山1993）、形式副詞「ほど」句（cf.井本2000）においても、述語動詞句の意味タイプと意味解釈が連動することが指摘されている。

⁶ 「パンを焼く」には作成事象の意味もあり、このときは頻度過剰解釈も同時に出る（由本

言語科学研究第8号（2002年）

1997p.114, Jackendoff1996)。なお、由本は「焼けすぎる」が持つ意味的曖昧性にも言及しているが (pp.108-109), 形式化に際しては捨象されている。

⁷ 頻度や時間など事象に関する意味解釈には事象に対応する項の設定が必要である。由本は Kratzer (1989) が提案した, Stage-level predicate に存在する時空間項の援用を示唆している (p.118)。本稿では Jackendoff (1996) の概念構造を採用することでこれを解決する。

⁸ このときの移動距離過剰解釈はオランダ坂やマラトン-アテネ間の実距離ではない。動作時間も同様で、ここでの移動距離および動作時間は、多回の事象の累積的距離および時間である。

⁹ Carlson(1981), Bach(1986), Jackendoff(1983, 1996)などによって、特定複数の実体と単数読みの実体が同じ意味的性質を見せることはよく知られている。

¹⁰ 由本(1997)も同様の指摘をしている。「*その花瓶を壊し過ぎた。(p.112(81e))」

¹¹ Animate と Thing の上位概念である概念的実体を指す (Jackendoff1991)。Material Entity を含む概念範疇 (Conceptual Category) については Iwamoto(1995)も参照。

¹² Jackendoff (1991) では、他にも非有界化関数 GR など6種類が提案されている。

¹³ 川野 (2001) は [通過点] を表わすヲ格を伴う動詞句は結果の局面を取り出せないとし、変化動詞と対立する意味での動作動詞と分類する。その一方で、川野はこれを Telic な動詞句と分類する。本稿の関心の範囲から言うと、Telic な動詞句と判断されることが重要である。

¹⁴ 概念構造の形式化にあたっては、岩本 (2001a, 2001b) の表記法に従う。以下同様。

¹⁵ 「稠密行路」とは Iwata (1999) が導入した「稠密性 (Density, \pm DEN)」を岩本 (2001a) が空間移動事象における行路の概念化に適用したものである。岩本は稠密性によって行路を区別することで空間移動事象の概念的精緻化に成功している。

¹⁶ 佐野は [進展的変化] タイプをさらに下位分類しているが、本稿の関心の限りでは直接問題にはならない。なお、「魚はもっと焼いたほうが美味しい」が自然であることから、本稿は「焼く」を [-限界/進展的変化] と分類する。佐野の主張は佐野 (1998) を参照。

¹⁷ 構造保持束縛関係理論の基本的原理として、構成要素の投射は意味的に整合するかぎりにおいて任意である (Jackendoff1996p.344)。したがって、「パン1個を焼く」事象が過剰という頻度過剰解釈も構造化できる。このときには達成量解釈の意味関係を持つ構造になる。

参考文献

- Bach, Emmon 1986 The algebra of events. *Linguistics and Philosophy*. Vol.9 No.1. 5-16
 Carlson, Lauri 1981 Aspect and quantification. *Syntax and Semantics*. Vol.14. *Tense and Aspect*. Eds. Tedeschi, Philip and Zaenen, Annie. Academic Press.
 姫野昌子 1982 「過ぎる」『日本語教育辞典』日本語教育学会 大修館 373
 ———— 1999 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
 井本亮 2000 「連用修飾成分「ほど」句の用法について」『日本語科学』第8号 国立国語研究所 7-28

複合動詞「V-すぎる」の意味解釈について

- 2001 「日本語動詞文分析における「有界性」の有効性——意味的要件としての複数性をめぐって——」『筑波日本語研究』 第6号 42-60
- 石田秀雄 1998 「有界性の問題——可算名詞と不可算名詞の区分に関わる認知的基盤」『大阪教育大学英文学会誌』 第44号 大阪教育大学英文学会 21-53
- 伊藤真哉 2000 「事象解釈における限界点の機能について」 神田外語大学修士論文
- Iwamoto, Enoch 1995 A theory of thematic computation and Japanese spatial expressions. 徳永美暁編『言語変容に関する体系的研究およびその日本語教育への応用』 平成6年度文部省科学研究費補助金研究 成果報告書 神田外語大学 279-306
- 岩本遠億 2001a 「空間関係を表わす「を」格と行路の稠密性について」『言語科学研究』 第7号 神田外語大学大学院 13-42
- 2001b 「進行相と二格後置詞句の認可について——概念意味論による接近法——」『先端的言語理論の構築とその多角的実証 研究報告(5)』 COE形成基礎研究費 神田外語大学 33-60
- Iwata, Seizi 1999 Thematic parallels and non-parallels: contributions of field-specific properties. *Studia Linguistica* 53-1. 68-101
- Jackendoff, Ray 1983 *Semantics and cognition*. The MIT Press.
- 1990 *Semantic structures*. The MIT Press.
- 1991 Parts and boundaries. *Cognition* 41. 9-45.
- 1996 The proper treatment of measuring-out, telicity, and perhaps even quantification in English. *Natural Language and Linguistic Theory* 14. 305-354
- 影山太郎 1993 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 1996 『動詞意味論』 くろしお出版
- 影山太郎・上野誠司 2001 「移動と経路の表現」『日英対照 動詞の意味と構文』 大修館 40-68
- 川野靖子 2001 「ヲ格句を伴う移動動詞句について——アスペクト的観点からの動詞句分類における位置づけ——」『日本語と日本文学』 第33号 筑波大学国語国文学会 25-38
- 北原博雄 1999 「日本語における動詞句の限界性の決定要因——対格名詞句が存在する動詞句のアスペクト論——」『ことばの核と周縁——日本語と英語の間』 黒田成幸・中村捷編 くろしお出版 163-200
- Kratzer, Angelika 1989 Stage and individual level predicate. Reprinted in G. Carlson and F. J. Pelletier, Eds., *The Generic Book*, University of Chicago Press. 125-175
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』 ひつじ書房
- Langacker, Ronald. W. 1991 *Concept, image, and symbol: the cognitive basis of grammar*. Mouton de Gruyter.
- 仁田義雄 1992 「日本語名詞の数概念の標示について」『文化言語学——その建設と提言——』 三省堂 593-603

言語科学研究第8号 (2002年)

- 佐野由紀子 1998 「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』 第3号 国立国語研究所
7-22
- 城田俊 1999 『日本語形態論』ひつじ書房
- Tenny, Carol 1994 *Aspectual roles and the syntax-semantics interface*. SLAP 52. Kluwer.
- 山川太 2000 「複合動詞「～すぎる」について」『日本語・日本文化』 第26号 大阪外語大学留
学生日本語教育センター 29-46
- 矢澤真人 1985 「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」『学習院女子短期大学紀要』
第23号 学習院女子短期大学 96-112
- 米山三明 2001 「語の意味論」『語の意味と意味役割』 原口庄輔・中島平三・中村捷・河上誓作
編 英語学モノグラムシリーズ17 研究社 3-86
- 由本陽子 1997 「動詞から動詞を作る」『語形成と概念構造』中右実編 日英語比較選書8 研究社
53-127